耳袋　五

イ 5
1665
5

冥

○利欲過度乃事

財政ハ世の中の肝要にて萬民の往にかゝりし他あらくの
よく心得て切との物なれ氏まんこ乱に面々の家業
みなかりし本来太平の御代なれバ御治世乃道
乃ものに不法悟なきにて之の今もまだ村山の子孫
萬民もて利力旅井しら危前怪我をしける其
今ハまた家業に止しや以ての外やなしまする
商しりての村役の他力ともたえし村役ハ廃れなり

早稲田大学図書
嘉寿文庫
山名氏藏書
門 イ15 1665 5
新宿図書

といへは婦の為孫と称候しもハ只一字にて如く
高服しとも皆人よ大よまい賞美ましてもてなしと
加へしハ小商売節ふたれのちを志姫のてハ今
まのけいおのちからのへと讃美しるで壽夢
せしや大村段の短刀ら自殺しける為在でて也
刀と称しるや予一年依頼に在勤の折搦に仕
者村段の掛抱調ら積の中とて入せりける哉く
つくるはいこよのこて好ましき刀なるきまで申度し

其もの道八寸刀調けるに心有るのもの今もなく
賞美せける

四十六

○ある武家の士常に服ひ居たるが
明和の比紀州御部類の士富豪にて松平豊前守と
申せし人御くはいりしかハ其家に行る成し
其家にて予も家中に松平様御世して知音を得きし
ある武家の士に好まれしも見よりて仕けし
右の事とも小何としてある武家の者か候ハゝ

何某と申せし者当所に居住しておりしか世のうき事に付
病ハしきりに増りて妻ハ先立女の子の行ぬ
末婦たと不便にかへりみにいれ子孫にて両三年
過ありし神仏祈願候と色々手を尽し雑費の多く
有しかも不快せぬとて我身に添りかゝるのみにして
いよいよ何様の雑費もしたれハ病の外に
身の余りの病ハしきりに終りの果ハ我身をも
節ハ出離し未だ人の生死も知れす迷ひ

て難しき中にハ便を立てる事如何にして松山
なりたるハ其身の性中にて其の後此の世に嫁
之も如何なる関東へ参の勝手に行きハ
何し海仏平生女子これ智ある人
者ハ嫁しけれと人の家に去の後浄土宗
所の人々のうちにてハ神仏に祈るのみ
付候神仏に候へ深く沈して後りしやすき
事なりし 松山迄りき

四十七

○信濃と付さしたる事もなくて盛りの
川西武蔵野といふは国々もたらしたるよし由
来は此辺の者ども娘一人ありしと深く
くるしみ世に書き方もならひ手せりつ又く
對面せしに大坂屋といふ生れしものの情と受
申すにはかなく深くにも何となく又の事と
今く上京し彼はたれの許と子供には深
年寄りいわれのこと思ひに恋の心ならしくなし

いと急しけにくりつ書面と見れば此方にし
きるわけぬ親に出でて尋ねあるめる事
いらせ若衆は先までに都へと京の学
若衆仰しくてまとめぬ歩む下
のことしぬ中の心もて白粉へ送りし
乃ちの夢にまた若衆の人とあつけるや
是に大夫眉つくとして烏帽子様にて着
と美しめどは常に人錢多くにて先尾して

遣て辛ありし暁しさまくのこゝろをつくし遊君

羽筆菴とよはぬるれよしありし筆ありしと芸

りうう文被見人の素問とて辞世一首しるは

須しれたりくと昔くと綴しうまふことしらずの

義にしたかひしまゝるありし語りぬ

四十八

○好色との京都ら都ちし事

をまち法楽遊の手引き上京し侍る少将の

者終りけり久しく年浮世書ししに世との京女郎は

分りにはやさしくけつまぬ女らは遠いぬところす

あれは京京都る傾城遊女はうらやてのみ女かれし

と常の女と文とかし京ち在ふせんとの若

のらぬ語りうらふ宣くおし入用とした

遊ちあは大内の官女にし契りをんとおる尻大に

版は類りふたうまて何年して官女に枝と

並せ座の物語にしせんてはさるに幸をは紙

うれは何らこて今一者は大雅のうに年列し若

と報し一あそひて祇園をさして参らんとて
色このみ入合わしまいらせて見えしかは三人
祇園へ同道して茶屋によりて酒肴とり申付
徒然たりしか酒くるしくて宇治わたりまてまゐりき
一つの奥なる座敷へ通りぬるに見ゆるハ廿斗の艶女
婦人に紙を出しなく夫へつゝしみ年若く居り此
女子は浪さ年ならす十斗なる振付の仕は浪にぬ
常にみ女房の物語せられりとて見えしける事同

ましたりし者行にたくひなく酒にて酔しく有しく
あそひの事に付けの若人へ世にすそのやうなる
世間をのかれひとへにむ合せるにそあらぬの種好
あしかれは彼売人中々はいふものはあはれ執心のある
こゝにも乃原寺物に伴ひて今日は此所
まり浅来にて参詣の戸よりのほかに
しかし座あそひは世間を出てのあそひのあそかくく
彼婦人に引合りて世々に契りやくしきこと

膝を折屈して謝には其家色とも申す人の様も
のみ出来たれは此女の推移のことも花待ちし出来て
住居は元年より久しき坊から法輪寺の御堂の前にて
何ら若しかりし氏家をも立て法会を営みに申さ
て都の此方へ出て行かん事書院の前を通り
御の挨拶は祇園の境内二十余人一度に遊ぶとも時は
又御供して神をとりはなしとて行きむれてのるる
ものと籠を彼男手挟みて出立ち何方にしてか出て来

今度手習の余りとかしく磯野なし元は元女郎
を前りしかれとも直ぬ彼の日頃せし町人屋本武
とるせし寝へ訪りける大元人元女郎まれ大方出
新背へ下りとし世の浮き人共ての者とて目面仕方無用
しぬるは金子大三両百文金を出して親遣りしを
りける年よりて堂々の入る身遣りしとある村
遊びてよくよくは元と籠と出て行くは何人とても
爲元待ちし路揚へとのとるとし見人と彼の悦ふ

貌しき合子と共に揃しまのかりしさなし侍りぬ

卌九 ○ 蒲類文恩未し原なり

去ぬる年の氏堺町なる猿と云へ染めたる猿にて候
這次或は女形の藤袴と云ふさせて大勢衆のあり
又独せしもの小才なる繼迄しとて直流れ
候者のことす躰と去迄す振舞し面白きもの也
語りぬ流る小太猿の囲子なと蔵しまして藤之者
にも古のるなど着りて罵るしきるなき事ありしか

浮く言出会しかば此の乱れたるをてうきたる
しる猿どもの者濡と言ひも乱とられくもの
濡るとうけさ人とめ二階の格子に揃ふて座りると
きるえ外く貴簡といふ寛躰しぬると猿どもならて
進もしも分施せしに給小六歳なりしかば彼猿
ども秋猿と共に梅海るる出花て我から
家業にしぬしけるは此度の小猿と申しまする
ますそれは故の浮世の御座りしといひなん我ふしきる

のまゝんとはさいはひもなくして痛みてやまずさうさうよ
と虚ありて又は彼様に依てさる穢くして様
也しの前に序くと謂元角なる肉に彼母様
相なるゆゑの経と様なりけり痛く死せしむ
なれば是元もの法と人の病に備ふ也

五十 ○ 外科通頭と法也とする
らえつまりし外科に阿蘭陀流と云ふけ若紋病にして出来
二方めに作る也流儀書也 阿蘭陀よりは世に善と云ふの膏薬鉢し

かくまいりて横せる半の辺長崎阿蘭陀の坂内に阿蘭陀
阿る・世ニ云フコトニ彼元が外科しなにて病人とこれに
ま阿十其本の始め云外観せしして妙しき
手足也しては下と同しくなる人善て
よのとは絶ゆるに膿ひなきに腐るなとも
しせし也なこを云摘とつくるに膿流に保道
まつく膿はあきれ切にこれ々と考へしに
肉をみなりしにも悉く今血は寒ると云ふ

そも見ハ何よく極楽世界に至り彼女の
足手と結へせらちしとさうし足柱奏湯と申て
前後と切放しう身絶せし者柱奏湯と云へ
せらちしそ流ハ善業とおしう女房ハ大方快
無後期しあらぬ一般方も意地ハぬと謂らぬ

第十一

〇人のしれそそもの末と押ささる
所ハ東方の善現不浄国ニ入ニ人安置すと入ろう
彼等へ流しけるに善光の座に安郡して是一定

書し趣物を讃歎しやうへ手ぬ是を遠成寄りて
又是ハ䌹者を見すを聞き云々く
常憲院様の御遺愛成何候の結構とみえ
そ前と新しく御所ニ於て是を何ハ猶く
何候もくせ方人と清しけ成大御遺愛ハ此門
いまし而ニ仰やしハ是ニ大納言ハ
ゆかりハ親ニ向て在趣物云くハ一言ハ
おろか小此ハ在上帝青衣宝示と勅す作者の

庶人とも凡夫俗子に出家方までも宗門
中のよの事務として付様に染して無用之
ことひとや深きこと也況や御法度の筋を
等閑に過来しての事たらんには寺の名家
にはあらし存所金の難しやうは仏法に於ては
やりくりの沙汰に越て法度に付而きしも上は家寺相
にいたりても在家や俗家や私宅に至るまて厳重
俗家事のことにてハ是非成るたる凡下の者とも世に高

せしとのことなく
将軍家の御法度を俗中へ謂てして諭しける
余りに都の者の中にも来りをは之中に出家して其
法縁ると致すに依して深く遁隠者なれは何ら
犯せしむれ入牢し牢内にて果て某の結構せし
第二　意傳を卿しめ母の恩を解しけ
されは某の母を深く御と仏し思ひ立ちして法度
おもてにても河原に法度の序をも罷て地獄へ

堕し今生る鬼の形となりぬ餓鬼にいたる人は
知識の眼には角の出しも見えて見えし餓鬼をみて
其人あり角も見えねとも餓鬼人に添て
能き人を庵に帰りて寝食とも忘れ出しけるに
それより夜にして其内に彼餓鬼の苦を離れし
彼の中有る法にも猶にして母に添て我等
其の所にも出家して経を読憐みて彼
出家もあれ一度人へと授けるに和尚を慈悲して経

出家の彼出家の持つ中も魚肉の出たり彼出家は
美をと見て我等は魚肉と嫌ひて新魚肉
とまりて其事を当にこそ憐れ
立ちて方々の其所に満ちたり彼らは向ひ母を
見て母に彼出家の法をと出家も堕ちし是を母
此角の見えぬ事法界におもひて形あり
母を疑ひし彼の餓鬼に法は角らしき
病し見えて悔し逆に知識の眼には見ゆる

前にも業に修行せしかハ今日まてお行はれ
於中に入りし魚肉を食する所にて異なれ
ことに付業を造し罪ある障となりて仏道をさまたく
しと語りし中に告ちして修道しけれハ成仏せし
の魚肉をすてずと云ひける出家はとし母の前にて
しとみえけるや女人修行あるものハ清浄におゐて
母と師なりし限り清浄にしと見りけれハ出家したまに
迷惑して後世の修道方便の徳なくる色さす依

りけれ修道方便ハ出家の法にてあるへし武士乃母と
師なれハこそあらめ持戒する事も難き事なく
中なれ共身を始めとして一つまうなる戒律の法
なきハ在家に在る修行をなして修行すへき事を
よく修行と云ふ道なる修行出家にてあるへき
あらしや江戸表ときときかり

第十三

○出家の者在俗へ物を与ふる事

当時ハ出家代官方と勤し結局年の以て

所し給ふへきとてましける彼五年秋ゝ五年てはやく古今
の深き勤ありし所也座敷よりて常に御座よの
事を仰らく思ひし時偲ニ弟子御参りて拝ませ
懐ひく手をかけとめしける武州甲府より抱へ来るを
一人目美しく色深きものとて身ふ入ニ在候へし
弟子相与へ抱り今小男の分在俗に二儘ゆかハ家
まよ美しの中に中付の彼けりてやさて銭ハいつ堂へ辺
の御弟子ていつ方へつし者抱らむらしむべき出信かしい

出家の為に一の夜を過て弟子を御るハ此為に
発心をしていりきハ五年まちなく結構に
遠のきし出家すきハ仏の路にて赤身ハ裸に
下帯へ紙衣をき身なりて弟子美衣大弟子美衣出信て
諸国へ修行して堂塔と寺も見ての弟子衆を遍へ
所くより来りけ付仏の修行に送りて里て行ふ
我弟子美衣まてやとてまたハ弟子美衣りてまつり

五十四

本妙寺大施札の事

白山御殿小石川見え伊豆守にて了人々まこと商ひは三代
篤かゝへし家と浪人の娘を出し本妙寺の墓前に
有し小麺時本妙寺の桜の下かけし秋よりの
札そしとつれて続き寵愛し御家の札守まで
見ぬは江の外りきて人の世に大名の札を
まゐらせつゝし法名を一つにして ぬいはてて又
ねがふとく 秋のよの札と 法名を記し 本妙寺の大名
の札は 翌月に出し下来は出でと 細かくは享保の比

本妙寺出るまでとて江戸表まで持行て[illegible]
寺の手札を持しと言ふは紛し有国なしけるかめり
本文
いまはきらしめ法して福と松より
享保の比とやら三郎の墓にて松原部しかるぬ
彼のまゝしらこれ出しの墓まいりし小児と夫婦
其上も小林ぬるは近き内にはお寺のものへ出るの
ましれとく[illegible]へ渡る[illegible]れ[illegible]しけり
たかに通りて[illegible]小梅へ入りと武田[illegible]と[illegible]

まなこの任使ハ出家ハ何事にかこつて身をかくし給ふ
の任して志望手前に志ゆ椿をすぬ切つて趣向
親々の身分ハ紀州河内一門人々を道とし
あやしき者とみえて通の出家の装束をかへて
の任しきたりまし様し所にハ大夫頭卜
我身に録をへ様してんてはしに彼僧家に従ひ
おもきのんなるとのまゝ忍ぶもして接称候ものと
深しけれハ家むれて御らぬ事ほのかに在家の堤称

にハ折らせ切のせうて彼出家に新たる身と思召に
家ますや彼の方と常し招きて目出たき境一番り
法身の若もよく信徳をは仕趣接手に切ける
道も醍醐の宮に常や水にいましはにに出なきより
人縁に血をも極は浅からて其後月影ありし
てゝく彼等く対面に無礼大切様にてしに掛ゝ初に起
あり法に調宝の命しまく不自由の下とまにかて
彼信濃と流しけりとこの毛て存せし事は手の女

三日路に吉良何へ行しに中ほど川ぎはにて
切害せられて死しける仕業更に知れざりし所に法
中の物語して知られけるは定て悪人の所為にて究
たるし流石に語りけるに目利ある人今ならば
少将が切りし其ものは別当殿の刀とて流れもし
者人間ほどは是非なき事とて吉良人の縁り故

第十六

○村井何某祖母武勇の事

村井何某と云し者と姉の家に居徳衛門と云し
妻子しと知られける所に又源五郎の妻女中々
五十四しかに聞えたる婦人にて或時源五郎
他行の留主に親しき者共大勢来りて一同
有りて盗賊ありしとまづ来りけるに盗賊共二三人
窓より押入りけるを見て此の所にて惣右衛門とつぶさし
入ける所に父の片ほどの祖母刀をつきて今
盗賊が入りしものの居所と相て窓の辺りに
出でと待ちけるに果して盗賊人の入りしを切

寄へりし忍前ともつとさし入たる所を様子ふ
彼装織の着く刀と寄廻し其の縁と結せて
其扉らく手を指とて世中引て面鏡の女房
ありしはおのふ如く捕へ不意と見ゆふ
手を掴へふさ双方武ふちら出ありやしまい
左何い法進れ跡ひ小人顕わるおその胸中
と寄迎しりちふ彼者の法と様く寄様ありて
法くとちこき海力を様くひくしけるに重人寄悪

ちと彼女房つへくさ法と前つて様子く流法ちひ
の母おしてありくあり廻如しいま迎りせし所おの備れ
りくと止めとさしくあふしく人しれずし双方のくちあい
近至りければ彼付ちらんと其扉への方へ国れと
しくありありとしてと彼女房あり廻く法たと
おりめへしりくりくれ婦くく付法たとされてちと
しれおりふいこの申く叔の形象し合ちて体しき

五十七

小児の身付身法の事

河之浜竹葉ハ西原寛ニて享保の頃ニ仕住と
かゝわりし者も有りて其孫今ハ山陰室古勤て
居しが後人なりて太河之浜幼年ゟ素もなく師
の後東ニ程山僧りけるに其母一僕の而来りし
と比り居りしに彼一僕女と俗しやいかゞ為ら
ありるなくとこなくて恐ろ年をかさねし大切尊
たゞ有りし我等僕と彼の幼児迄て彼僕ニ
菓僕と彼の上入込しられ其後中ゝ夫彼養と母

と罵りけるしも思ふにつけても孫の上を申ても是
しらぬ類を捜求め背中ならず皆きゝりける事なり
小児の身ならずして常ならぬの工夫をこらすに案り
行りしとぞ

第八 ○ 高風居士といひしは静かに老をいとふ中
世を遁れし庵の主にて彼は紀国ゟ出て其の中に
ゆかりありしくらしぶりしや其の親類孫を招き来て
誦経などしけり其後の仏事の内乱れして大親の

振口労と振上下捨りきまんてく面をとを
とゑひしくまくきたし　差後口小抱留いりをし
振上し刀在父に組をけてやし清りしと為て
向ふへ家御しりと父の上と越しく向ふへ
延りうる父はに座ぶ移ゑて讀乱んとのと
れ押りる振留あつてすと諦りぬ
第九
此時信虚く清得てはし此のす
曽我兄弟の候盛い此者今日所付ち　城付

并しさへ孫ころ年やけ信てるよしこ　此勇の所
垂田町を廻りしか五郎荒しとも急ぶ顔し
此兜十之郎い僕よ素と流さし角力あると伝に
清まへ申し事の成るう人命にし向ふ成るとして
候身の直年とる成身にや付兄弟とき卒し
孫ろ取りし　十之郎信まるさ存せと思ひかと有を
のこりしかく天下の候を相まに渡合て我家
兄弟とてき卒しりる気ひくまいりてるを孫しと

いひく御不動辞ふ只管とてま至しりられ給ふ
如子の中より振返りくえてゆしてこ東馬と云職
為かかとて大らさ此佐兵衛の出雲守りるき塩谷
十之局書院へ　御付家老いわら浦佐兵衛殿の
頭ならいハ能すハ何しもと奉書かしく十左衛門とて
評判せしされ佐兵衛と西條の中にて殿の同係とし
出勤なりし　能登守城守今度之佐兵衛守たま善
一段あれはて川辺之はいかしるそしと申けるを案て

ええ出勤りしく則次の毛へ帰て出られハ並ま申
仕舞しあれ夜番人麻上下にて家中あれまを
に候もでろりられハ何事も去く山縣守出て其上此て
杦く出身ハ浦田にてさまえへ書町にてあるまさ流
申されは随分ス志帰へすら精くと出まて参られ
申されとりるのハ山縣守の書院に　御付加ら殿の交を
に佐兵衛と申ま来て家宣て夫々殿出間付ら　坂付りると

六十

○御の人通りて去年予定しま

追手門出陣と勘し将門左手に元服給ひ上勅
ゝ元服勅定を蒙りて本将軍として大將に
成りぬ左手の元服の時其時の用をもやとひける
草履と一足残付して帳中へもうけ候ひぬ
決めて此中出陣の節帳し折り去れ大名衆にも
右達草履取に至る迄踏のころに合せかはりとて
人並ぬしく出陣のをりふしかの事として出仕とても
右手御家中へ帳中へ国々の草履と申を是へ持参

乃ち男存しく色の出しと合せて付しけるに
前をし本望ののち節分を五十とけむ候に
何とく運にしく差上ける何事も讀む
しる御沙汰とて進上をしけるが中書
元服勅定へ歌の色出候て御沙汰遣る
大名衆世話有しとや

五十二

○ 自然とて精出しぬ入れ候はんとする
ある人きゝ何年出世のいくつくらいの

ゐまてあれより急しきしもなれは是奇代なりけれは
此念を聞しもの我もと思ひけるに氣の毒にくも
これ雲駒也とて又不思議に時あきのうへ檀つめ
芸挽ぶもしりとも思ひて日々走廻き人集待して
家路に祈りしに雷雨はけしく大風吹わたりけれ
のみ哉しも此別法と極めて集待なりけるに
庭も白く掃はせける事知らしむるとおもひなり
て今りたつるく法の一式ハ官へ出し又合りて跡

和尚中ありく念してまうりのへはかき迦しられ中は
急にちる處侍りけしとかくて方丈へ案内なりけれ
にて茶を根且振く出すには日毎に走廻り
身も不思の如此やとも年々は難難て頼みし何年
人々おもしく出まてもしいにきて念しけれは
天竺まてしとは是より右の積婦しまた南表裏の風書
と急りし處記の月毎に集待しましし
世に流りし後は信仰しさらうとのちかに参て奉るの

世の事業ハ其事ありて利益何とおもいとにし
事業利益と共に動中よりかくしぬとくとも
思ひかけ天禄なとの類ひ動ひ来り必ず手せ
りある道をハ行て顧ミ遊ひて無能せしもの

六十二
○投機ある族と覚へし

天明の頃ハ世に投機の事ありて大ひに人を流行しつ
寛政の頃にハ此災難あちこちの處存りし所に問屋の
廻ふ何となく為ハ売買してり投機の沙汰ありしも

世を渡る名を借てしる故謂ふ門者の賢き族
ありて又且りくに根廻り用に心学道を始めの由にて
ありて心学道をさし取りて其中に済し候へとの
ハ心学の出盛光に伝せ彼是やう事きとの
ありて彼族此屋の門中し加へと急て心学と候
ありし小仏信門と其もて大家に流行しけれ
ハ心学も又好事きりしハ彼信と心学道の荒立輪
当今のハ心学を好事せしもての其の流行りける

太閤ハ勿論諸大名衆の参詣にて出来し候へ共
ゆゆしき事也されハおしなへて参詣諸人群集せし
此時何とのたまひしにや其後程なく御隠居のよし
にハ仕給ひしハ程なく大地震にて一首
と詠しけるよし当時に殊に聞へて今に伝へ
一方広寺大仏殿並に鐘の銘の事

第三

大仏殿造立の事

天正十六年の春より東山におゐて

其後慶長元年大地震にて大仏殿崩れし
後又秀頼公再建ありて落成に及ひし所
慶長十九年の頃大仏開眼供養一件ハ
鐘の銘の事にて焼失ありしと
ふたゝひ造立ありて後ハ寛文の頃に至て
倒れしを又人々に心を尽し元のことく
なりしか寛政十戊午年の七月雷火にて焼失せり
今ハ其跡に大仏の形を木にて仮に造りて御座候ハ

水濁の中の水とよふせとひえて濁の中よりふ
ぬるとこえしハ千歳大万く遊ぶハ水の衆生なり
ハ色也之ゝ了諺ハかしこしひとなり二三千ハ花ならし
えしふ御遺言して語りぬ今日ハ宝文の水と
こめし年まひあまりぬと知れかしいひし寒し
天地自然の義有し水年ふ出ぬ年と合せ
ましまことハいときゆるハ言へきなし無数

廿四

藝道ハ志を思ふ

芝居役者ハ宝暦の初ころより元祖衛門第一
染めとて女形のことを花とて人の称し
りしかものゝ名女形の外いかなりし男の出家
せしよろし役ゝ年目の時は常ふ格ゝ別て
古郷ふまし跡し常ふ女の形たる或時大臣ゝ
立居でありし人のとまし小性出ある人ゝ化粧せ給
しられしれ色ゝ人のくと存まてたるへ嫉妬八
是ハとく見苦しきしハ義理の恥あるべし

静かなる夜なりしと云伝へしとぞ

六十八

記録に猫を載しあることは宇宙

猫は妖獣なりといへる事は何れの宇宙

にもあることの記録の載にあるべし

疑しくいひける記録に載したるを知るべし

あるもの多く記し置所日光

御宮御造営に付彼の山に三年ほど罷在て大

御宮御参詣は世に称する所の権現様いたし候所

深山の白狐の名をとりしとかや申伝へしとて

和漢の鳥獣の形状を写しものは無し

あることの中にかかる程の形状物に猫いうなへき

妖獣なるものと申ける事中納言様

御宮参詣ありて奥の院の御造営を拝見しける

東照宮と申奉る奥の院入口の御門

墓所内の彫物は猫にまかる眠り猫を彫付

その名を眠り猫とよびしけるとかや

六十六

○今村治助ハ

此親ハ七十ありて関東植田切組ケ村の

出生なり

御代官さま一国の治助ハ文化年中村

のものとも入れて名主の請負人となせり

ほか在の出稼ハ御用にて奉公しむ

伊勢の大宮参詣の者にて二十日余りとまりしを

ありし伊勢の宮川の大宮参りて大老の中に

さては御代官ハ治助事ハ御主人の心にて悉の

人足様とさしたる者ハ伊勢大宮伊勢の大宮迄のり

あハ今度ハ相国の頃ハ御蔵まで人も

出会いくし人足千人にかけ付し渡地へ

参りて右人足通せ内にも御用の人足

役に行ハ請負人ハ役人ともに

傳の者にて中付るハ治助面白きさ

御心にて旅籠へ御手千人の者と集めて相場の

秋のころ少〻所労に入候而此方にも参宮伊勢
の人多く尾張留守の人々ふとしてあまたの別
御披露し可然候へき御清水ニ而も参候と存候
萬ゝしても頼み奉り候ほと〻かたし候ハゝ
御〆しきのほとハ人も大方に膳達て御清水
に仰も可有之候し御人様とも御事の御用
あきたとのしきまて候ハゝとも天気今日は下向候へし
足の弱き四ほとの候ハゝ御所中にて候ハゝ御用意をたのみ候

我らも同しやうに存候ても思ひ立候御事
参りしが先当所なとしく殊の外の事と御申て
いよいよ御供ニ今日千人の者共ともまかり出候千万に
候て候御所中に候ハゝ我等参りの御ためにて候御頼ニ
も又御清水の御用と殊にとも申候間御挨拶に成り候へし
て御ききなし少〻所労へ我々とて一御遊しつゝ入申
ともひらかれ候ハゝ御挨拶のためさまかりなき候
しく少〻所労行く門ゝ今ここにて萬ゝまかり候

手柄ゆへしられる事に御使つかはされ彼くせものの
たしかなる所に随ひ道を坊主衆の人々を尋ね申
けるにそ手柄人まて心得しと申しけれは坊主衆
存知の利ありと引かへ仕出しける所御聞およはれ
又しかるしたくまておのゝきけり

廿七

世業に依命を失ふ事

いつはりの世にやありし本因坊或日碁会に出て
碁を囲しけるに其座の者に碁をうち碁打

ありける席の者一人ありて彼に勝へき何とそ
本因坊と手合せんとて頼けれは辞しかた
及ひけれは打つゝけに其日も碁中に隠れ
なく碁手を打つゝ本因坊二目の眉
とられぬ本因坊も気を失ふ事十万も
三目置てと云けれは志ゆしく其たとへ春
此后へ手ならうと云ふ其者碁司かしらん
彼を降し中りけれは本因坊余り此后をきれ

釈しまい古書院を取まして一人のおもかけに恥へ
頼りあらぬ物しらすして序を論して恵をおもはに
殷周二国の覆てうへしも本は女人の故なり周坊
一国の傾くにあるしも婦人の智恵にあらずき
小人をして本国坊も禄を数せしに従へんと方し
けるや宗国も周坊まゐりけるハ成風へと
云しけるかくしも又つまつまく

実

女は自ら賢明の事

子り知ても其力に　されハ　以ても其この女を慕き
取史のみ遊女に打てまり宿に通ふの類
明の書に迷ひよりハ淫妻ゆゑに嫉妬して所
やるハ元し淫れ女へ迷ひなへハ家国に入国と
貴しめ人の身を保てに迷ひのあるよりまた
むかし我か今ことを見える淫女を事して家を
至ありし妻妾あらんハ世にありまるし何し候ハ
足る人の深りくし無くてその身の覗え携はり通し

衣服及真じと妻伝はし彼杜女の清く手本と七條
あるよのふたとかく出でし川角に但に合じける
豹をもしるてまみて月日と送りし流罪も
ききよの心し恥し源をみ前ハ月日も経るに
深ひ色も執もさめるの名しも一年斗の内に大妻ハ
知へ伝けるとや大妻任まふ如りて有ける春
乃ニ戸ふまりし一眠にて亦帆なる女にありし

五十九
貴信るて恥と知る年

岩倉へ帰りしんの語りけるハ国家九山の領塩左分
発りしことのふ深くもきとせしる男も身上の果
老ひ果しくも詣て親の常語みる死と
極みて彼女ふ語りけるふもそも死して十八さる
事なくしも我も昔ふ死んと思ひ討死と称して
其日数と極めるなとくし死せる命と妹女房
ともかつけ付ふ子供或ハ其あり出へ其今ハ小袖
雖思ひと涙ぬのんをて泣ちふへけるも彼男も死と

極メリタル古枝ヲ出シ　知ル人ノ若[illegible]ノ根ナト
[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]テ嚴[illegible]貴人[illegible]
[illegible]今[illegible]シ[illegible]不[illegible]ト[illegible]
[illegible]テ[illegible]須[illegible]ト[illegible]テ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]レハ[illegible]白氏[illegible]ニ[illegible]文
[illegible]ト[illegible]シ[illegible]ハ[illegible]姉[illegible]
[illegible]シ二[illegible]ト[illegible]シ[illegible]

七十

○南風出の事

孫叔敖ガ両頭の蛇ヲ殺シテ[illegible]両頭ノ[illegible]
人ノ[illegible]レハ[illegible]シ[illegible]
河伯[illegible]ノ[illegible]ノ[illegible]
八幡[illegible]ノ[illegible]不[illegible]守[illegible]
[illegible]シ[illegible]不[illegible]シ[illegible]

七十一

○借押の[illegible]ト[illegible]ノ[illegible]
[illegible]ノ[illegible]ト[illegible]年[illegible]
[illegible]ノ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ト

勤のうへ誹諧の押出而は以て達し侍ると多か
差等ありて左ることくして押出而は譬へば庭の上の花
も又人の事とせしはたゞ松風葉わたりしても都てゆかず
の出而は目ハ天滋調連句流の上は流れ
うち御作法の為にして中々仰せに於て新規の法

七十二
第十 物後のこと

物名乃とより位段分ちて或日葉中の字道
露後と清の精葉とたてゝ業しめて都て良然人

抑のうへの時々ちこゝに歌と侍りは度々あるとて
類しけるか達等道主として海は第一と好みなく
いひ侍りては我よりも第一と好しく今の身の
上にし時分の第一に深く楽しまんと浦に
しくとハ法を止めぬとぞ覚りは不保にて之
難く少しく存じ奉候而は第一にしてと申上ぬは
示すして言は給はゞ申しなりて某に於目の
頭をさかくの其甲松何某用の元来て立て秋にし

茶とよんてしいはく古りぬるは物よやは害
とはいひしうを将後植の花へ至りしふき
河より塵をも青蘿に掃く古き葉茶を煎
松の枝稜も争ものよのとされに焚く新き清
嫩の茶焙葉入葉取して又ニて料を出する
称しきこのと並へ無能の人いまに行るはくえ
侍る人気又凡雅なくも茶と也つて独楽し
理ならぬ行にも煮の芽の果ぬや語しきるとむ道法りける也

明恵上人情悪を茶のみなり
高僧の語にいつ迄の間ほは古服はの外煩ひなる
道師に茶語るほどに能人多く入て飲茶せり
ほれとて其のまゝ人多く求むへき事なりしと
拝常茶にも泥者のつきも覚えぬ出けりけり修禅達
中にくる人多くの代とも十葉ねと枝にも人に
其いの上人多くの茶も慎にる医国に管を要き
橋て人の中着をし切らしとよりて摘出る気にふく

吟味の上小笠原にとのそく入る事を許されし人
かくし上りけるに
明石も弥年ありけれは大親はさ病にて果や
みは肥風せりやしも弥年ありけるに大病にて病死
のうしは渡りけれは親とも弥しとのゝ怨(?)礫ら
御付ありて親の好に葉求めにも出身の栄
へ御へは親に大様道へうる名の流
ありし可相計の流りあひぬ

強勇の者ありけるとぞ聞えける
常憲院様御代に于時に勤ける者に於
のかゝり者の内に三十年文松平(?)に了
この悪しく弱とも小上りの者弥(?)は(?)
ありなし(?)と弥(?)なとも彼上りの者とも是あり
あゝ弥(?)吟(?)味の上入牢ありける(?)由(?)
是を遂(?)としといは(?)ゝ(?)あつ(?)て弱としるなきと
いはれ(?)ける(?)の兼(?)事(?)は悪(?)く(?)なる(?)ゆゑ(?)なりしも

急用出来せずんば仕舞迄居たりし由
常憲院様御代生類憐の御趣意を解
りかねる人有り少しも不及とのさま申しあまた
ある人ハ伊丹氏事御尋ありし文の趣を答へ寛文
もたる人と親しかりし由浩然の娘婿なる人ハ
羽二重の上帯を三節程へ長切候やハ入申し候
切結ぶ時勝負に書しけるとて今一りう遣はしけ
右ゆきし後父の御跡に在人浩然として勇気を以て覚へし

七十六

浩気勇猛自然の事
予が伊丹氏祖先の一族浩然の人間に居たる
人なりしか其の者ハ予が中年まで存命なりし右
彦左衛門ハ寛永年中おもむきしも[illegible]の由
至りて大猷院様浩勇なる事ハ[illegible]
右京町へ参り揃へて頼み候へは[illegible]
地に下りて右の事を[illegible]
長刀を差し[illegible]小脇に[illegible]の[illegible]

配しめられハ接木ハ切難しぬきこと人殺すまてまく
五丁町中大路をて通り時は血刀をふせかけしに
天水桶のかけよりつまつて出す男を縄して搦めくる人
小路迄大門とめくて帰りけるを御所に帰りてつく
此ひとりハ忘れそて大門ハ取て譲りまて早す
手傷ふ殺人を隠して時の程より吉原町にて
人静まて傷消天水桶のかけより出て本の所に
しれたりけるくハ人の欲に男有りと語りぬ

七十六
搦ふ人舎と判し業諸の中
京屋の末ふ舎かを取締まて御家中へ訴
手前の内何よりつゝ者を人京の絶の者死刑
ち沙汰ける其の者死ふ添んて因獄至
常に人ゝ伺ひける我ふ付後死刑ふ及ひすとく
かゝる中にかくの年月を経ハ浅海へきにし
此我ふ小犯せる罪とても死とも今かすし
能出て我ふ死刑として免まいせよく千年を志へ

ましらしに道常治と申せし山伏一方とて住けり
西国の他諸国を巡りにけり年々に国はしくめ
けるか此人今のの事に候何年程に至りしと
ひとらにおもしき力は代々諸国へめくり大きにし
語きしと此国に下りぬ是天下に名を知られ
上りしかいろにしくし連歌をも好みて修行者
はつ家に山伏と歌詠し大力と奇事なし此所に
も死けりにも一年とまりて帰りし大力法師なり

七十七

此に清盛将軍の事
太政大臣の後には法皇を鳥羽に押籠て福原
こし遷都に人々の心を悩まし南都の寺々を焼
払ひ山門の何事にも仏法をかろしめ人を損
ひとつの国々をしらせし人々を悲しむ清盛
ともに此の大臣は人の中に勝れ
さらは入道にもかく語りしに天下を取て見
御法の中に法皇の御恨をも深く候まし

御前御藥館の小常も兼升之所々下宿候也
阿りもありて去年より疾を遣し給ひし白
にしる人の中にて安ふきもし無候

七十八

〇 青病乃こと

安藤氏和巻疾らくよりて久同じやまひにて臥ける日
ら見居住ふよりて雨とも人にて行き又人のおもひ
毎夜ふりて雨にて入くりきれ疾の入てあひの雨と
えしふ見る文同じ熱く者なりてましく見えにしく

やしなひしにと静脈に入りてなくしと静かの脈し
りなふ耳の内痛む事にて医師をよひ来りて
きれとくて湯に疾火の烈しきならくして
後業しかりふに他の耳に聡く聞えて様の
うら痛みとるにつきての出ぬ又我に入て右の耳
ともふかし限りなふ見ても又同じく出ぬ果てり
頃かく性氣しりなる来たて女色の色にて不表
しく右病氣と服して女色を止みるにつめて

聞しられけるとぞ

七十九 ○ 忠死油断なき心中
浅野家の浪士大石内蔵助良雄の徒出府し
なりし今日切腹と沙汰ありて細川家へ大名々
在宅の処含み饗応ありて切腹の席にのぞみて
案内せられ候に家の給仕し小坊主家来
其時常の処に家来参りて相見て切腹ありし
了後は出其心中にあらず出るなるべし

なしおかれて席へ出て切腹せしとぞ
平日の忠節をあらはし候故老臣
源をしも少しもまつ事に死な

八十 ○ 公家家礼相分の事
当世相分をあ寄預り置付当主の相分は格式
御はたし所に出頭家郎を職位と業にして
手切いたしける者あり小川何某といふ所々
そして毒の故にまた付遺れ身がなる情寄し

ほとは医のうれ謝にしけるに打ゑにひとるよのか鯉の
二ひきしと彼医師の元へ送りけるに預て俵安
鯉をまいらせしかし料理せんとしまゐらせてゐる
出入のもの常よりの荒池へはなちけるに荒地にて
しつくるまゝ鯉をりはおちと出合し後々路を
しけり小川へ始りけるに後に小川の荒地蓮
一葉のそのかくしてる是おとしけるに荒地蓮
一首の狂歌をよみて古人へおくりけるとなん

村先にかくしてるとその池へなるるは元の小川にすむ
来る由に根分をまいらせ世の中に多くそれかしを返す

八十一 ○香蘭類例とをなせしけり
此国今までこの年中常にある世の
小野様と翁し人とあるその指導すれ
気をまた根あるは体しその物とかしせしと給
りけるは力ありてし侍るその後に彼者
秋は百段ちまでし彼者来年まてなし次第秋秋

その娘出て机のもとに掬へおし殺し究竟寒き
帰りしに手度後に見えつるとて一夜計かくし夜
記とて見えければ国境寮の中へ投合して往合に
趣男と夫の中へは是非なくて番落して今宵は
ゆりたる海のもと汀深くめして須臾眠りぬ

八十二 ○孤情のとの思ひと彼すると
駿河蒲原に梅屋某とて村に梅の徳経寄を悦し
後に山中平吉といふて人里はなれ庵多の中に
いと大道のかたはらに或年平吉父の大病にて
久しく川辺にけるか沖中に辛き薪を拾ひしに
猟師の家に一人の息子の年にて猟に狩を業とし
の事にのと清しとて暇あるに若男の病を継
家業にて死と待にはしとて先祖猟業の家業と
ととのひ其男の天年に代へし去年人今見
の子医師の業をいたしつゝ国に名高き業は
其家の男へ移し医師と称し候業医なりて後を

信して其兄ぬかるゝ事のあるにもといひしかとも猶た
荒療治なりハ病因をしらすになりてしるをとりの医師の薬
もちゐしかハ病ハ終に斃るゝ又本草の敗ハ此医者の手段
にやありけん又紙屋の介ハ前ニ薬物ハありて
古人の跡まて同し趣ハ其故に主薬は中に
根さく人使して中さ之といひ中にハ古人の
もとの方の病気久しくの孔残ありお後の為なる
手経ハ根本の善ハ証をなして身方の病をも防く

薬用のお後中を能かしたといひて証なるを用方
しと深く論するハ平常に治療さきハ其ふくの義を
証する人しれ信りのみにて薬の葉出て大医師と
さし識ニ療治彩りを不時の使しく經不出後
なりなるに不知之後なるに平生病氣時ハ候ふ
随ひ時に又梅の内にて秘して呈見出しなる
随種乃梅調をなして様にて深く枯れたる

八十三

○思ひ出事と申し事

予か知たる人に出羽国佐渡の男あり名ハ清何とかいへり
京に住て此者ハ小保といひしか彼人の弟子となり
てしかと検校に依てありしか彼検校ハ今は一人前に
あかりて町並へ数多の利をかし候ひけるに其比
病にて死けるゆへに此の代の後を譲りしと
出ひしや地主の男と謀て彼銭の分ハ今度も
返さし然に其後弟一族知たる妻の
よくしれたるか子細あり見し次第

今此講のつきたるまて有つる金子の割様有る事あ
座頭か請の方へ申遣ひけるか不残いはしと
津の国の金銀を講の中にて割に候ひぬるより
彼男一類あつまりて大かた六人の分けにも昔ハ難古
津の国にて是まての事ハ金子の取立を済所
申さされハ金子をうけとりしか今しも出来く

八丈

好留ニ承済ニ而ゆるされけり
享保元年のころ成ると聞し此事ハ府中へ出て

その子なりき智恵ありて当年男盛りにして歳は四十余
まづしく渡世にて足軽して小笠原へ入りて奉公をし
其中にも此家にて諸書の礼式を見てしらるゝしり
たくましき男にてありし彼どの小笠原へ入りては
町人の出しり折りし彼町人の中にも大抵町人は今
用ゐらるゝ通用の書様も大いに用ひらるとなへてより
そうしける者の其の小笠原の事へといひて古
き衆ひろめ奉公人せられは来遊して今より衆様に

売りもし万事にはしは売りとて此事して書候
とて書簡を記しとて礼式として今まで世に流布し
かくして書付やうなども是とおなじきは彼町人
大かた彼にならひしの書状認め様などして御心ぬ
ことを彼流の文字にて作法をなし彼より来遊
又其世の者も出来ても出世して彼流儀の元へ
まり役人との事も其の伊賀お頭を勤
も不知其後小笠原と書かれ通候てしたり様に

積ハ合しく不残ニ免被仰付候て其外の事ニ候
地子年貢金之儀入町人へ被仰付町人へ不残道海在
候處金子不納積りて地子と申すもの少なき
不申　然ハ其後之ハ商売屋敷へ用立てもの也
地道海帰り在所之不残ゆへと申て右之敷地壱ヶ所へ
其後しれ之又地子年貢金町方へ渡し置候
其の不足をハ申立て我等の地子銀等ハ一ヶ年分
右の通地役帳免之上御判被成候し我等共ハ道金一ヶ所

地子銀之儀ハ前にて其後とも申立つ公の清ニ
免之ことし　御沙汰にて丁寧に申付ハ被仰付候
右之趣ニ付　同役にて申渡しく先ハ申立候へ
申付ハ右町人共一向不存候のよし申来りてしれは
地子年貢金之儀右屋敷其の屋敷不足ニ付てや
金子の義ニ付く　此處被仰付てこそ後々迄金額
しく此迄通り入へ　御座候にして其後も其人々の
御沙汰相替候て宜候様多く親類人の役義

とも種ハぬ男なりしかまた身ハ先悪の報ひまく病
死せしか積悪ハ天罰のかるゝ所二代目何某
半人姐御となりし斯と成りしを家ハ終にたえり

八十六

池尻村の女つれ住居の事

池尻村といふ武蔵の国池上本門寺の領にて一村の
貧村也其の女を召仕へハ第一して嫉妬深からす甚
決へしかるに浮気なる女とならハ因果の言葉は
大分常ならハまた有事となりての観の代になし出来

寛政の頃池尻村の女の召つかひしか宮人保延寺の
浅にも何人常なき方ならぬ風天井の上より大石
ふらしと落りしを其のまゝかしかりし色と成して灯
火の中より上りし歳ハ常陀なと長押へ飛て次の間へ
至り中にも小しきハ夜ならなと庭下の庭垣と
満くかりしを庭下の庭より茶碗茶碗あるハ茶碗
ただ三枚落て付し有る古内垣を越て夜半の庭へ
至りしへもう天井抜けしはなくへと今に

何し様しきるおりけ天王寺へまうし寺の西ハ様と
笑しく遷りしとて天下懐紙なりけれハさて
こなたへ出るにかりけれハ火の光と見けれは手代
ありけるに西之所りけれは家の子ニ而ありける
先人出て見とし此状の此所也の女とふ住所と
云ふ所にて申付しに此所の者の申けれは
子孫を相たしめ小さき様ハ能々勝手宜しけれ
此所の三條様ハ赤氏子と申し候八地へ出て来ませ

急ぎあるにけるハ此様其代ハ可申候条へ
流れける氏筆耕ハ細かなりしか親類共来母と
候しけるにまかせて流りぬ清直ニ而候と
申事しかる諸国の氏子を借し様候とも
あまたしてならぬ事なし候に詳しき也

八十六
○妙法寺記之の事
東叡山文殊様の御事にて小妙法寺にてある
万事其光堂ニ而此事記之と承りて何某の

御代者やましくなり
御菩提のためとて供養は婦人ゆへ法経
して妙法尼と申法縁大事に精進とぞ申し
此ものに女中方の縁にて利平様御勧め
聞へし大妙法尼兼ねてより小野殿様より御聞へ
酒をやめ此の度妙法尼は上方出世やと悟る事
君に於ても上方の出まして御供せり
有之一人にて守る年の東向の堂にて其名法縁

その人存じたる者にて世の中の様法養庄兵衛
菜の人申してあしく思ふにおもふ又死去と申し
御世に急ぎ死の御前に出し其上の様御法事
乃菜に古人の為に仕置て御勧めに菜物進め
ぬまでて其御身は御成る存として涙にて
様の御いは法事のすべてもまた読経
様せん御恩の為に諸事一尼の法事
何やらつりに付侍者し世のものやとて重ね内

持来りさうして其の年を出しけれは日本一の名人
ありけるにまた納言か納言と申されて其道に判
者判をしけり入てのちは其名を知られて其の
妙法院殿と追てよみけるに立楽凡にも今に其名
の異女母は折く其席にて立出めしけり

八七 ○

発句之躰の事

此は弁天社院殿内にて法楽連歌とて何と神楽
ゆすりて発句之神の古名をしるし候なとの一句を発句とと

まゐらせ候也上つかたには其諸をのしらや古語なと
見候はゝ同しく堂門に候ては前の代は発句をもし
東国にはすくし付候は以前は其く秘事候
のかれ候人は其年の芸には発句之躰と西條に
梅は神祇流茶かくて掛し賦り賦物賦代
発句之くには其の付句と申て是を作者等に其年の
内発句のさきみちの愁ひなく偏に其神の
守りをかへし数代我等か家に執筆

一往還にして神と出家をさへつけおかれしは
鳥獣をいましめ禁忌のため守りなるへしと
かゝる詞と虚空の中に見えて頼みもしれける
利益にやおもしろのとさまにかくして後は
しかるに天神の御前よりは道々人民ならびに
是非を避り境内の猥なる者は社参を禁し
このよし諸人は別当両所へ申し之を許し
さて今は天神境内に何の女もよせさせて鳥獣

其外社参を願ひとも許されさりけり
去年よりの願両年皆年中止しぬ

八十八

西国筋の風俗語りつ
仏前に参りし時は信心深くしてうやまひのと
むかしも今もかはらぬものなれとも
このころは猟師の中に諸国に入りて猟す
とはいへともその浦の中には猟をやめし
むかし程の人にはあらぬとなりけり

も人ふ付しやと尋しふむかし今の人ふ付とそ
見えさりし頃なりぬ

八十九

○上州池村石文の事

浅間山焼の記に関東村と云村有しに長濤浄助
勧して上古の行国郡池村ふ石碑ありと世ふ語り伝へ
乃石碑を古跡として人の称しける池村の碑称
きこえしと石の文字ちかふに今まて和銅四年に施
片岡郡緑埜郡甘良郡の内を割て多胡の郡として

羊太夫といふ人に給ひし碑の面に文見えしに
其趣を則石摺にして持帰りし碑面の写しを
古跡ふして今に絶す人々古にも語り伝へ書留ぬ

九十

○

こと法に難くし無證なり

或人の語りけるハ日蓮宗の何某の陳者と宗山

大覚禅師ハ売をして伝て帰てハ日蓮も

釈しこゝろ語りあがりけるを聴時日蓮へ面色は

念仏をなせしハ大阿弥陀仏をかくしのらぬ鍾分

からぬ西蓮人ぞといひけれハ語り終見たりして

一蓮に語らん人に語り語りけるに宗まか宗く

日蓮も始め是頃て宗寺の京内一七日の念仏て

一宗にとりて念仏をとけて語りけるを善寄とかり

けれハ立所に死せんとて気しければ果して感

通の面とかけりけるに郡鄙の法と称し

けり尤壇とかりしを西に大阿弥陀堂へ至りて弥陀師

ときけるに陀羅師ハ未だ堂に入て方にあり

しく語りけれハ陀羅師帳の如く宗めぬ是も

七日の念仏とて陀羅と寄りけり在日蓮も宗

中しとかけりけれハ中身ハ西元の念仏と宗にれハ念仏に

伐つくれらんいさうし人職命とゐ信しくとも
百姓の悲しみと相ハ宇宙ハ大きくおいて
笑ふ宗ハ芝んて男のわ刀そしか花も仏人多所作共
も坊さ日　财の者ハ我も切しと又なハ日蓮
しも土居大経師の徒と称し感嘆すれハ
人や彼人々かく語をも何も何しや

九十一
○石文石龍宗のなり
日蓮宗ハ石文石龍しよ流を　法吉ハ龍称と

石文ハ天台山門称と常ハ文分一統の法ハ其の流之
理ふかく大ふ文石龍の流と寺ハ者ハ絶ま
りてしきよの之平評定ふ当候と称り候造り
法浄しくハ其のめハ法浄宗ふ或ハ太右ハ白
ふ一人従経の人て石文石龍の宗流と称し老之
天台宗と称ふして天台宗の　御付りうちは
上総国南阪坂村ニ大宗流と称ふる者あり
平勉ふみて　進之纪りうハのりけうりまして道

おもうともなり

九十二 ○ 好も不好もなくまゝなり

尋りあるる人ハ山寺なとにても飽まて酒を好める

人の気にいり座敷の花面肴ハなきゆへしらず肴と

植く栁なとしく梅へりる肴ハ酒と撰て遊て

ちらひぬ花ハ樽前ふましと人のいひける花酒とあれ

よせけるも先一杯呑てからね酒を肴に呑せ人の

気をいし酒の中しき酒ともして飛をみ関係

酒を外價徳をまて千文其の酒と旅の肴なり

みえしとさひしくさらにても百文内の酒呑るよ

ふゆもくし則先如く繪と見しる百文酒ハ上料也

よのく兄として酒ハ酒くしくも其味と何のわけ

呑くとても酒ハ肴ハ撰まてしても酒の和

と思へくちよふくるく肴へ根もひしきく

九十三 ○ 志ハ如何也萬事ふ依しなり

山円ふ帳の書出物へ動けり因は心材千慮

花井の流の形意専らにて形と云ふ新類に
おもひ寄るなれば則ち音にて流と称して御舞
方へ遣はりけるも破れせる者のなる大流との接
我しける道にて古流の者になつて後流と称し
けるにこそ候の中とぞ始めたる八人の秘花
の流儀失せしかの今の姿にて其事中
こそ稽古しぬもとし坊方なれば諸方みえて山村
流けるか山村も花しけるは只是能にしても伝ふる

ならず是迄御所方にては何事大流と称しける
京都の罷りにて乍にて見ると乍にて鄙じう
山村は京都町奉行より　御目付として京に御所方へ出
つかへ千年久保田筑後守に仰の奉行代と
勤め候迄より来りつまりて時御目付代りかへし
当家にて使者申後家へ同じく当家の
御ならしける当家へ御所方もし御を
運ひし当なる家の常なる能の流と

又つゝに彼光主る出ひし深く縁ふ方なりけ哉と
知らぬ雷しく縦之てに御道ハ有りけるを又
候く来たりおへ木の御恩の謝礼しては文
清見海く田麿のこ子出山村作ら中しせりけるに
あら道のりかき去事経道巻し深し是し
しら作るてそし成仕合し身におい遣ハさるゝと
深かはに出勤之者ひにあらて深りし山門も
同く出りて人会作ら始過とて 秘花有りけまし

卆四
○我ハ今より重まりけ
悔きほのまゝや出家の身の果なりや萬福
そ袖もしわら後人のあとの子のと連く仕合
とやむつる我自往来の浩しかて一度世ハ
隔たりし不意平段申しや頼に深く不止
親しる保深に上ひく仕合し候事に付前段
とく歎け共一隔し世ひ切て後程世にハ
是ひつきろ高是不申候ハ候事にて我かし

く船より高サ殿につゞきて中にはいと
きよげには侍らざりけれは倒にいたして落とされ
此人々は今の渡とかゝれしは某郎義盛が近侍
けり中にはいかで中々それにて彼深き淵にまぎ
かゝる渡は弱ひく渡ると彼此人をさそへて
みと橋のよね川中へ投入我身も続て入にけりして
果ししなり

寺とかや今をかりし者共

駒に越中前司とて主従の者武蔵の国猪俣に
林ぬを並べて何ともの者四五人一同に使して
居ける所に若殿原の出来て人毎に門に入て見れば
越中前司とて大力なれと思ひて我もに
之人今日は利に敵りたるとみやる越中前司大に
様子をよく思ひしきぞ坊主はここでにわかに
とのゝ子細でありて大事にあひしるは
只いかでかとて酒ことし参らせしける

狂の甚しきに一度さへなくして千年の春と経し
明入て酒のみて居りける所へ平家の一門にて
答けるは此比の悪き事に一僕連て伴ひ千里の
一類の中にも病死と申出候ハは天下乱れ候ハハ
これ甚かりし也活たるものゝ中に我ものかな此ましまし
ゝ事の外多のよし請けて仕る足手踊りては
何かの調ともぬけ行かたとひかなふ人の
帰せしに儀し事ともなりいはんのおとを

時におゐて出て御覧有りける所へ山海春て
祝事として合金二三文請中とは思はれ動き
の経を何も国まで参やし和尚寺さんには早速との
不存調へ此様なる共に若是こそは神変の
中にいうかたにして今晩中律にい此方の葬送
も調ひさらし若のまゝに有合いにて二三両かしかく
とらひし相手紙にて銀子を拝み入思ひしゆへきれは
今年ニ両かし是けるを相尋大金子をかりられ地獄へは

仕様おもしろけれハ一座大わらひとなりにし
これを當りの人感りぬ

九十六
○鼬の咒乃事
今度形文ハ大黒恵美寿ニ鼬の通りて紙書し之
にハたのしく書て札ニ来ぬれハ道ハ鼬なく
らまるとのちよし元人の感りぬ
鼬の咒ハた咒なの徳おきらく咒文
妙王のまるしけらん

九十七
○一休和尚乃事
山村信乃以邦次ニ付候一休の墨を請て持参
このまゝら面白きぬしく見せたひぬ
〽
元の身を枯れつきとの柱杖となりはなる世の有
おつや後く
めでたき元母ハ一休の勝りしとの有りん面白き
みなまいいなふ笑ひしぬ

卆八

○福を探て福と植しかり

摂州三田門前の狐京都辺の馬に女に化して
此所のよめ入に九年くらい見とりて一夜と云ふ事く
あまりかりく奇妙飯油揚やの馳走して
扨狐は稲荷のつかはしめ福を取れば福とする
世なひに旅行年福を与へて取らは取れは大
狐あそぶに銭を福と与へていふ事ぬ
くおやかく勤め福と植るは実ままよと稼ぎし

都人の為世の為になるやうに道を志し
好みて老ならし御しなに見てて福と棲
此民に不益ならんと福と稼ぎしとて
見れば福を探るは無くしといふとも
益にならん人へは或は潔浄を頼むにて
植えの物と為し又は浴させてよく眠ると
見えし一生を祝と与へて或は火の用心を
書の釈義知るべし志てかて人々と祖付させ

おぼろとこれ迄あまたの在所別條と
あまたりはそのかくして語りしなり

大尊嚢乗根岸配前中度京
守信のぬし蝶称のいし海別なり
写り行の重一かし阿難
とて巻かいつけあおりると
行りのまゝふ為清書しるよし
ちかしほりく是とかり交信し
並とのなり

干時
寛政十一年己未六月　山口氏蔵

[illegible]十二號三百三十六